インターアクション能力の習得を目指す複合型授業
――中級日本語クラスの教材開発と実践――

細　井　和　代

Development of Materials and their Usage in Intermediate Japanese as a Multidimensional Course for the Acquisition of Interaction Competency

Hosoi Kazuyo

Japanese in Context is a course designed to develop learners' interaction competency. The purpose of this report is to reflect on syllabus design, material development, and their usage at the intermediate level which is designed as a multidimensional class. In order to assist students to acquire competence for interaction with native Japanese speakers, this class has been carried out by deliberately integrating various types of practices such as varying the place of learning (e.g. inside and outside the classroom); varying the types of classroom activity (e.g. interpretation activities, exercise activities and performance activities); varying the content of activities (e.g. language related, sociolinguistic related and sociocultural related). It is expected that the issues and problems raised in this report will stimulate further discussion on language teaching and learning for interaction.

キーワード:　インターアクション能力、複合型授業、シラバス、教材開発、実践

はじめに

神田外語大学留学生別科では 2001 年から実践日本語（Japanese in Context）という科目が設置されている。これは「インターアクションのための日本語教育」（ネウストプニー 1995）を目指すクラスであり、筆者は 2002

年から中級学習者を対象としたレベル 4 を担当してきた。この報告の目的は、その 6 年間に行ってきたシラバスデザイン、教材開発、実践を振り返り、インターアクション能力の習得を目指す複合型授業のあり方と課題を探ることである。

まず 1 節でクラスの概要を示し、2 節でシラバスデザインにあたって留意した点を述べる。3 節では教材開発にあたり留意した点と教材の特徴、及びそれを使った授業実践の具体例を、授業の流れに沿って示す。4 節では授業実践の中で直面した課題とそれらに対応するための試みをまとめる。最後に 5 節で、「インターアクション」という概念をどのようにとらえ、日々の活動や教材の中にどのように取り入れていけばよいかを考えたい。

1.　実践日本語レベル 4 の概要

1–1.　対象、期間、目標

実践日本語は IES 全米大学連盟からの短期留学生の必修科目、留学生別科交換留学生の選択必修科目であり、レベル 4 はカレッジレベル日本語学習歴 3 年程度の学生を対象としている。学生数は最大 15 名であるが、学期によって異なる。大学授業の半期（春学期・秋学期）ごとに開講され、90 分の授業が週 4 回、約 4 ヶ月間のクラスである。

実践日本語の最大の目標は、教室内外における実際使用場面でのインターアクション能力の習得である。レベル 4 では、中級学習者として、日常レベルのインターアクションだけでなくアカデミックレベルのインターアクションも目指す。

1–2.　学習活動

学習活動は視点を変えると様々な捉え方ができる。たとえば、活動場所からは教室内活動と教室外活動、活動の性質からは解釈、練習、実際使用の活動、学習内容からは言語能力習得のための活動、社会言語能力習得のための活動、社会文化能力習得のための活動などがあろう（ネウストプ

ニー 1995、ファン 2006)。実践日本語は、このような様々なタイプの活動を複合的に絡ませたシラバスをデザインすることで、活動に具体性や現実性を持たせ、総合的な日本語能力の習得を目指す「複合型授業」と言える。

レベル 4 では、解釈、練習を中心とする教室活動（語彙・文法・表現に関する学習やトピック関連資料の読解等）によって言語能力や知識の習得を目指すことに加え、トピックに合わせて学外での体験や交流の機会（ごみ処理施設見学、小学校訪問、川柳互選会等）をシラバスに組み込み、実際使用場面での言語使用と、社会言語能力及び社会文化能力の習得も目指している。また、各トピックの中で各自が興味のあるテーマに関する情報をインターネット検索やインタビュー等により集め、考察し、目的に合ったタイプの文章（スピーチ原稿、説明文、報告文、レポート、ビデオスクリプト）を作成する。そして、作成した文をもとに、ビジターセッションでのスピーチ、意見交換、話し合いの内容要約発表、作品発表等を行う。学外活動も含め、このようなインターアクションを中心とした活動をパフォーマンス・アクティビティー（PA と略す）と呼んでいる。PA は様々な場面での実際使用である。

2. 実践日本語レベル 4 のシラバス

シラバスデザインにあたっては、トピックと PA のインターアクション場面を重要な柱とした。その中に、必要な表現に関する学習項目と社会言語・社会文化に関する内容を組み込んでいくように考えた。その具体的な内容や学習項目と位置づけを整理して一覧表にしたものが、学期ごとに作成する授業計画表である（付録「2007 年秋学期授業計画表」参照)。

2–1. トピック設定にあたり留意した点

トピックが進むにつれて視野を拡大していくように設定した。具体的には、学習者個人の興味から日本での日常生活へ、そして社会問題へという流れである。さらにその中に、日本文化的な要素や世界共通の社会問題も含めるようにした。

トピック 1「情報提供のスピーチ」では、各自が興味のあることについ

ての情報をスピーチという形で話す。原稿を準備することによって発表者自身が情報や内容を再確認し日本語でどのように表現するかを知ることができるだけでなく、スピーチやその後の質疑応答によって同世代のビジター（大学の学部生）やクラスメートとのコミュニケーションのきっかけになると考え、最初のトピックとして設定した。トピック 2「川柳・俳句」は、日本人の日常生活に溶け込んでいる伝統的な定型短詩を知り実際に作ってみる機会を提供したいと考えて設定した。例として新聞の川柳・俳句欄、サラリーマン川柳、お茶のラベルに印刷された俳句等を紹介する。また作品を作り発表の場を設けることによって、クラスメートや同世代のビジター、さらに趣味として川柳・俳句を楽しんでいる地域住民との交流も視野に入れた。トピック 3 は社会問題を扱うが、学外活動を含むため学期によって内容が異なる。春学期は「日本の教育」、秋学期は「環境問題」を取り上げる。小学校訪問・ごみ処理施設見学の体験やインターネット等から得た情報に基づいて、社会的な問題について考察し、レポートを書く。トピック 4「メディアリテラシー（CM・広告）」では、社会におけるメディアの影響力を考える。CM 分析の後、公共広告 CM を制作し、発信する。CM の内容は基本的にはトピック 3 のレポート内容を参考にしている。

2–2.　インターアクションの場面設定にあたり留意した点

トピックが進むにつれて、インターアクションの相手とより深く広範囲に、より自然な形で関われるように PA の場面を設定した。具体的には下の表 1 の通りである。

2–3.　学習項目の設定にあたり留意した点

各トピックに必要な語彙、文法、表現だけでなく社会言語・社会文化に関する学習も含め、場面に応じた話しことばと書きことばの使い分けが意識できるように留意した。

話しことばは場面や相手によって使用語彙や丁寧さのレベルが変わるため、「様々な場面」において「様々な立場」で「様々な人」と話す中で、そ

表 1　PA の内容とインターアクション相手に期待する役割

トピック	PA の内容	インターアクション相手 インターアクション相手に期待する役割
1. 「情報提供のスピーチ」	日本語でスピーチし、意見や情報を交換する	学部学生 スピーチの聴衆、意見や情報の交換相手
2. 「川柳・俳句」	互選会を行い趣味として句を楽しんでいる年長者と交流する	地域の川柳会会員 共に句を楽しむ人（作品発表・互選・説明・感想交換）
3. 「日本の教育」（春学期）	インタビューをして、レポートに必要な情報を得る	学部学生／ボランティア市民 インタビューを受ける人、レポートの参考となる情報の提供者
	小学校を訪問して小学生と交流する	小学生 現実の日本の小学生、交流の相手
	レポートを発表・説明する／意見を交換し推敲のヒントを得る	学部学生／大学院生 意見や情報の交換相手、推敲の協力者
3. 「環境問題」（秋学期）	ごみ処理施設を見学する	施設の案内担当者 現実の施設職員、説明者
	レポートを発表・説明する／意見を交換し推敲のヒントを得る	学部学生／大学院生 意見や情報の交換相手、推敲の協力者
4. 「メディアリテラシー（CM・広告）」	CM 制作にあたり、ビデオ編集ソフト（i-movie）や PC の操作説明を聞き、必要に応じてアドバイスを求める	メディア教育センター（MEC）スタッフ 講師（i-movie の使い方の説明とアドバイス）
		メディアプラザサポートデスクスタッフ PC サポーター（PC 操作や編集技術のアドバイス）
	制作した CM ビデオを発表し、企画意図の説明や意見交換をする	学部学生／関係者 CM ビデオの視聴者、意見や情報の交換相手

の違いが実感できるように設定した。レベル 4 の活動の中での「様々な場面」とは、スピーチ、インタビュー、意見交換、質疑応答、見学、交流、依頼等であり、「様々な立場」とは、個人、グループの一員、質問をする側 / される側、説明する人、意見や感想を言う人、他者作品の紹介者として等であり、「様々な人」とは、クラスメート、同世代の日本人学生、年長者、小学生等である。

また書きことばも内容によって文体や語彙・表現が変わることに注目させるようにした。話すことを前提としたスピーチ原稿や説明文、パワーポイント用の箇条書き、レポートの語彙や文体等、それぞれの特徴と違いを知り適切に使い分けられるように項目を設定した。

各トピックにおける表現に関する具体的な学習項目は、授業計画表の「社会言語に関する学習」「言語に関する学習」に示した通りである（付録参照）。

3.　教材開発と授業実践

3–1.　オリジナル教材

実践日本語では、シラバスデザインに沿って各レベル担当者が開発したオリジナル教材を使用している。レベル 4 では 2007 年春学期使用分から、それまで学習項目ごとに配布していたハンドアウトを整理してテキスト形式に体裁を整えた。全体としての系統性や計画性を明確にし、各活動の位置づけや学習内容をわかりやすくすることに重点を置き、現在の構成・内容に至っている。バインダーに綴じる形にしているため、宿題や評価のページの受け渡しが容易で、トピック単位で学生に渡しても最終的に 1 冊のテキストのようにすることができる。

3–2.　教材の特徴と授業展開例

教材の構成は授業の流れに従っているためトピックによってやや異なるが、基本的には、トピック概要と評価の説明→トピックへの導入→語彙・漢字に関する学習→読解→文法に関する学習→体験→情報収集→作文→発

表とディスカッション→テスト→評価（フィードバック）である。以下（1）～（10）ではこの流れに沿って、学習活動項目ごとに、教材の特徴及び開発にあたり特に留意した点と、授業展開例（2007 年秋学期トピック 3「環境問題」の授業記録）を示す。

（1） トピック概要と評価の説明

〈教材の特徴〉

各トピックの 1 ページ目にトピックの概要・目標とともに授業の流れを示したフローチャート（図 1）を示して、視覚的に理解できるようにした。コース及びトピックの全体像と、その中でそれぞれの学習や活動がどのような位置にあるかをはっきり意識させるためである。また、これに対応させる形でトピックの最終ページに PA に対する教師からの評価と学生の自己評価表（図 2）を設け、到達目標をより明確にするようにした。PA に対する評価は、パフォーマンスだけでなく事前の準備も対象とした。自己評

図 1　概要チャート（トピック 1 ページ目）

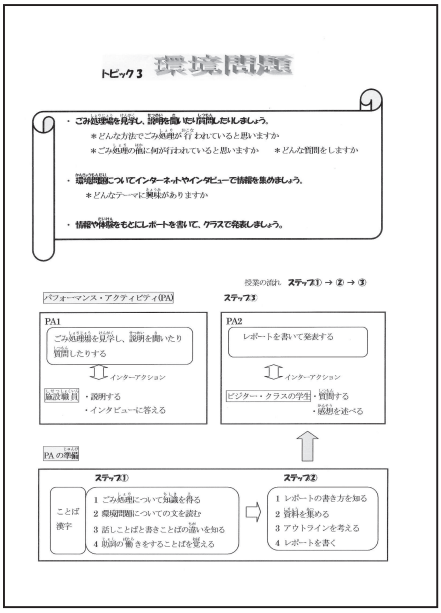

図 2　評価（トピック最終ページ）

（目標に対応した評価）

価は成績とは直接関係ないものとし、トピック中の各目標項目と対応させ、どの程度達成できたかを確認できるようにした。

〈授業展開例〉

図 1 概要チャートを使ってトピックの概要・目標・授業の流れを示した。「環境」は世界的な問題となっているトピックなので、この段階で学習者の持っている知識や意見も聞き、興味を引き出すようにした。また、最終ページの PA 評価基準と自己評価の項目を確認し、目標を意識して各活動に取り組めるようにした。

(2)　トピックへの導入

〈教材の特徴〉

各トピックの 2 ページ目にはそれぞれのトピックに入るためのウォーミングアップ的なものを配し、いきなり語彙の学習に入ることのないようにした。

〈授業展開例〉

学外活動（ごみ処理施設見学）の準備を兼ねて、ごみ処理の方法や施設についての概要をトピックへの導入とした。施設見学の前に知っておきたいことば、千葉市のごみ処理施設の分類、ごみ発電のイラストを示し、説明した。また、施設での質問を考えた。

(3)　語彙・漢字に関する学習

〈教材の特徴〉

トピックの読解・作文・インターアクションに必要と思われる 20 語彙をリストアップし、「意味」と「使い方の例」の欄を設けた。意味は各自調べて書くように空欄とし、「例」の欄は穴埋め式にして応用範囲を広げられるようにした。また、語彙リストの中から BASIC KANJI BOOK VOL. 2（2004）後半レベルの漢字を 5 つ選び、漢字そのものの意味と熟語（英語訳付）を提示して語彙を広げられるようにした。書き順と練習枠もつけて自律的に練習ができるようにした。

〈授業展開例〉

語彙リストによる学習に加え、英国大使館と環境省によって共同製作された環境 CD-ROM[1] を各自に 1 枚ずつ渡し、CD の 10 のテーマの中から興味を持ったテーマを 2 つ選び、わかったことや気づいたことをメモしてくることを宿題とした。テーマは「地球温暖化って何？」「わたしたちにできることは何だろう？」「排出量取引って何？」等である。クラスで宿題のメモを発表することにより語彙や内容の再確認をした。

(4) 読解

〈教材の特徴〉

トピックごとに読み物を用意した。過去の学生の作品・新聞・書籍・インターネット等から、トピックに関する知識、視点のヒント、書くためのヒントが得られるようなものを探した。トピックに対する学生のモチベーションが高まり、また、時事的でありながらも短期間で状況が大きく変化する可能性の少ない生教材を選んだ。

〈授業展開例〉

インターネット上のチームマイナス 6% HP から「ピーターラビットとおんだんかのはなし」の部分（http://www.team-6.jp/peter_ondanka/index.html）を読んだ。子供向けに書かれた文だが、環境問題に関する一般知識がわかりやすくまとめてありルビもついている。URL を示すことで、出所を明らかにするとともにその後の必要に応じてさらに情報が得られるようにした。また、千葉市のごみ処理施設でありごみ発電も行っている新港クリーンエネルギーセンターを見学するにあたっては、前もって小学生向け案内書を読み、見学に必要な語彙とおおまかな知識を得ておくようにした。

(5) 文法に関する学習

〈教材の特徴〉

トピックの PA を効果的に行うために必要と思われる文法を、接続詞、助詞相当語句というような大きなくくりで提示した。それらを使い方に

よってグループ分けし、ことば、意味、例文の一覧表にした。意味は空欄にして学生が自分で調べられるようにし、典型的な例文を示して練習問題につなげる。広く浅くではあるが、後の実際使用場面での選択肢を多く示すことに重きを置いている。一度に多くのことばを勉強することになるので、分類や提示順に留意するとともに、例文や練習問題文にトピックの内容や語彙を使い、負担を少なくするようにした。また、トピックや PA の違いによって場面によることばや文体の違いが実感できるようにした。

〈授業展開例〉

「地球温暖化」に関するレポートを書くために必要な、レポートの文体・表現を学習した。「です・ます体」と「だ・である体」の比較の他、話しことばと書きことばで使われる疑問詞、接続詞、副詞の違いを示した。また、レポートをはじめ書きことばで多用される助詞相当語句を取りあげた。

(6)　体験活動

〈教材の特徴〉

地域の施設を知り地域との交流を図る体験として、川柳互選会、ごみ処理施設見学、小学校訪問を取り入れ、教材には体験学習の準備のためのページを用意した。

〈授業展開例〉

新港クリーンエネルギーセンターでは、小学生向けビデオ視聴後、説明を聞きながら実際のごみ処理過程を見学した。コンピューターで制御され、有害物質を出さずに衛生的にごみが処理され、その熱で発電した電気でごみ処理施設と隣接するスケート場のエネルギーがまかなわれ、余った電気は電力会社に売られている。施設の見学を通してごみとその処理に対する意識が大きく変わった学生はこの学期に限らず多かった。また、千葉市では総合学習などで施設の見学をカリキュラムに組み込んでいる小学校も多く、毎日のように小学生が見学に訪れており、自国の環境教育と比べてその充実ぶりに驚く学生もいた。見学の最後に、ごみ処理だけでなく施設の建設や維持にかかる費用、地震が起きたときにはどうなるのか等、現

実的な問題についても質問し、後日簡単な見学報告文を書いた。

(7) 情報収集

〈教材の特徴〉

PA に必要な文を書くための準備として、学生はインターネットや資料、インタビュー、体験、講義等から情報を得る。特にレポートでは語彙も内容も難しくなるため、教材自体が情報収集活動の助けとなるようにした。具体的には、トピックについて語る上で必要と思われる語彙は、難しいことばでもリストに載せ繰り返し使うようにしたこと、読解教材にインターネット上の記事を使い、その HP やリンク先から更なる情報収集ができるようにしたことである。

〈授業展開例〉

環境 CD-ROM、チームマイナス 6% HP、ごみ処理施設見学、各自の知識等から、「地球温暖化」に関することの中で最も興味をもったテーマを選び、インターネット等で情報を収集した。また、資料の日本語が難しすぎる場合の助けとなるサイトとして、リーディングチュウ太（http://language.tiu.ac.jp/）を紹介した。

(8) 作文

〈教材の特徴〉

読解や過去の学生作品の分析などを通してアウトライン作成のヒントを示すとともに、教材の中に作文のアウトラインを書くページを用意した。

〈授業展開例〉

資料をもとにテーマをしぼり、教師やクラスメートと相談しながらアウトラインを作成し、アウトラインに従って文を書いた。レポート第 1 稿の提出日を決め、情報収集とレポート執筆のために 4 授業時間を大学のコンピューター教室での個別活動とした。学生は必要に応じて教師に質問したりアドバイスを受けたりし、授業時間だけで不十分な場合は課題とした。第 1 稿完成後教師の添削を受け、添削された部分を検討・修正して清書した。添削や検討は、教師と学生の対話の他にメールの交換（ファイル添付）

によっても行った。

（9）　発表とディスカッション

〈教材の特徴〉

各トピックの PA では様々な場面、 様々な立場での発表やディスカッションを行うが、その内容や必要に応じて、活動の準備、活動中のメモ、まとめ等のページを用意した。活動の準備と結果を書き残すページを組み込むことにより、トピック中の活動の流れだけでなく、他のトピックや場面との違いを意識できるようにした。

〈授業展開例〉

ビジターセッションでは、留学生 2〜3 名（教師の判断でレポート内容が近い学生同士）とビジター 2〜3 名、計 5〜6 名ずつの 3 グループに分かれ、自己紹介の後、最初の発表者がアウトラインを述べてからレポートを音読した。次にそのレポートに関してグループで質疑応答と意見交換をし、推敲のアドバイスを行った。同様にしてグループの留学生全員のレポートについて発表とディスカッションを行い、最後に各グループの活動内容を要約・発表し、他グループの話題やビジターとのインターアクションの結果を共有した。 各グループのレポートの内容は、 CO_2 対策（「京都議定書」「排出量取引」）、各国の環境問題への取り組み（「アメリカの環境対策」「北京はオリンピックのために環境問題について何をしているか」）、具体的環境対策（「リサイクル」「環境にやさしい自動車」「風力発電」）であった。

次の時間はクラス内での発表会とし、留学生同士が同グループの学生のレポートのアウトラインを紹介、紹介された学生がレポートを発表し、クラス全員が全員のレポート内容を把握できるようにした。

（10）　テスト

〈教材の特徴〉

語彙・漢字リストから読み書きのクイズ、 選択形式の文法クイズ（それぞれ 20 問程度）、トピックのまとめテストを用意した。学期末テストのうち筆記テストは各トピックのまとめテストから出題した。出題形式を変え

た確認テストの積み重ねと各活動中の使用によって語彙や内容の定着を目指す構成にした。各テストは実施後にバインダーに綴じ込む。

〈授業展開例〉

漢字・語彙と文法のクイズ、トピックまとめテスト、期末筆記テストの他、期末口頭テストの中に、自分が書いた環境レポートについて 3 分以内で説明し、教師の質問に答えるという項目を設定した。これは口頭テストの 50％の割合を占める。何も見ないでレポートの要点を話し質問に答えられれば、内容も語彙も意見も自分のものにできたと判断してよいのではないかと考えてのことである。

3–3.　各学習活動の関連性――レベル 4 の教材・実践で目指したもの

以上述べてきたように、教材開発と授業実践においては各活動が発展性のあるつながりを持つように留意した。語彙・文法はそれ自体の習得が目標ではなく読解・作文を効果的にするための準備と考え、読解はそれ自体が目標ではなく作文のためのヒントと考える。さらに、作文もそれ自体が目標ではなく、発表やディスカッションのための材料と考える。つまり、PA はトピックで学び自らも作文をした内容や表現を駆使した現実のインターアクションとなる。

このような設定から、PA の前の作文は重要な意味を持つ。PA の内容により、聞き手に興味を持たせる情報提供文（スピーチ）、状況や気持ちを伝える説明文（自作川柳の説明）、要点をまとめた報告文（調査報告・体験報告）、論理の展開がしっかりしたレポート（環境問題・教育問題）等、様々な種類の文を書くことになる。また、目的のある作文、説得力のある作文、事実と意見を区別した作文、内容にふさわしい文体・表現での作文を目指す。

しかし文を書いただけでは有意義なインターアクションはできない。例えばスピーチを行うには効果的な発表の仕方の工夫が必要である。そこで、社会言語・社会文化的な要素として、話し方、パワーポイントや実物の利用、会場設定、司会等の役割分担や会の進行等を事前に話し合うためのページも教材の中に組み込んだ。インタビュー前には、声がけや質問の

しかた、予想される答えに対する次の質問等を考えさせるようにした。また、小学生、同年代、年長者それぞれに対する話し方の違い、レポートとして書くときとその内容を話すときの文体や表現の違いにも注目させた。そして何よりも学生がインターアクションそのものの意義を感じられるように留意した。大学生である留学生が、その知的レベルにふさわしい発表やディスカッションを日本語でできるようになることは大きな喜びであると考える。その障害の一つとして語彙や表現の問題があるが、実際のインターアクションの中で繰り返し使われた語彙や表現は実感として身についていく。アカデミックレベルのインターアクション体験による達成感や喜びが味わえるような教材と実践を目指した。

4.　実践上の課題と対策

ここではこれまでの実践の中で直面した問題とそれらを改善するために行ってきた取り組みを具体的に示す。また、毎学期末に行うコース評価やクラスアンケートの中に見られた学生コメントの一部も取り上げ、さらなる課題や対策を考察する。

4–1.　環境的な要素

実践日本語のようにシラバスデザインの段階からビジターセッションや教室外活動でのインターアクションを念頭においているコースにおいては、環境的な要素は重要である。神田外語大学は付近に様々な施設や会社があり、国際交流ボランティアに関心のある市民[2)]も多く、活動を行う上で協力を得やすい恵まれた環境にある。大学の設備[3)]、チューター・ビジター等の留学生支援システム[4)]も充実しており、それらを活用することができる。しかしそれでも、他のクラスとの重なりや学部学生の試験などにより、教室予約やビジターの確保が難しいことがある。ビジターの安定確保のための対策として、学部・留学生別科・国際交流課が共同運営しているメーリングリスト利用の他、募集スケジュール一覧の学内掲示やキャンパスウェブへの掲載等、別科や大学の協力体制がとられている。それでも応募者が少ない場合は学部の日本語関係クラスや留学生支援活動登録者へ

の声がけや学生食堂での募集チラシ配布を行うこともある。また、学外活動に関しては、受け入れ先の確保と日程調整という問題に学期ごとに直面する。これらはやむを得ない部分ではあるが、シラバスデザイン上不可欠な要素（インターアクション相手や実際場面）の確保が不安定であるというのは担当者にとっての精神的負担となる。大学・地域といった規模での理解と協力が不可欠である。

4–2.　時間的な問題

レベル 4 における時間的な問題としては大きく 3 つ挙げられる。1 つ目は学外活動で、訪問先での活動の他に移動の時間も必要なため通常の授業時間内での実施は不可能である。そこで、大学、学生、訪問先とのスケジュールを調整し、大学の休講日に実施し、その前後の授業 1 コマを振替休講としている。2 つ目は、教室内活動での目標項目が多いため一つ一つの活動にかけられる時間が少なくなってしまうことである。学習内容の検討や精選が必要であると考えている。3 つ目は作文に関する問題で、期限内に仕上げるために、ほとんどの学生が授業外にかなりの時間を要している状況である。また、添削に際しては一人一人とできるだけ時間をかけて話し、伝えたいことを明確にできるようなアドバイスを心がけているが、決して十分な時間がとれているとは言えない。しかし、作文が最終目的ではなく、次のステップとしてインターアクション場面を設定していることと、時間的制限から見て、これが現時点で最も現実的な対応となっている。改善のためには、トピックや学習項目を減らす、あるいは作文の過程そのものを見直す等の根本的な解決策を探る必要がある。今後の課題である。

4–3.　社会文化的内容の扱い方

社会文化的な内容も扱うクラスを担当していて、注意が必要だと思うのはステレオタイプである。学生が来日前からもっている様々なステレオタイプだけでなく、来日後の限られた経験や教師主導による新たなステレオタイプの形成の危険性もある。また、「日本社会における望ましいマナー

や行動」として「～の仕方」といったものを押しつけてしまう可能性もある。日本人でも人によって感じ方や行動は異なり、留学生の受け止め方も同じではないということを常に念頭におき、機会ある毎に学生にも示し、視点の固定化を防ぎたいと考えている。さらに、情報の信憑性、公平性にも留意したい。

4–4.　学生のニーズ、レディネス、ビリーフ等

学期末のコース評価やクラスアンケートを見ると、実践日本語に対する満足度が学生によって大きく異なることがある。それは、留学の目的、自国での学習スタイル、日本での授業に対する期待、日本生活への適応度等の違いによるものが大きいように思う。

これまでにレベル 4 を履修した約 100 名の中には、少数ではあるが、市販の教科書を使わないことや授業形態に対して否定的な意見を持つ学生や、「期待していた内容やレベルと違う」と感じる学生もいた。それは主に漢字、文法、会話、読解等に関して既習事項以上の知識やより高いスキルの習得を強く求めている学生であった。このような、学生の希望がコース内容と大きく食い違うというケースをできるだけ少なくするためには、留学決定前のコースコンセプトの周知が重要である。

一方、「このコースをとってよかった」という感想を持って帰る学生もいる。そのような学生のコメントは「トピックや PA がよかった」「語彙や文法だけに焦点を当てるのではなく実際の場面で使ってみるので、経験を通して多くのことが学べた」「チャレンジングだった」「日本人と話す自信が持てた」「クラスの学生とのやりとりから多くを学んだ」等であり、日本語の授業に言語学習のみを求めているのではないことがわかる。

中間的なコメントの多くは「初めは大変だったがやっていくうちにいいと思うようになった」「全体としてはよかったがもっと文法も勉強したかった」という 2 タイプに集約され、全体の中でも最も多い意見であった。同じ学生の中にも留学を通して変わった部分と変わらなかった部分があり、その比重が満足度に反映している可能性もある。

4–5. テキスト

3 節に記した通り、レベル 4 では 2007 年に、それまで学習項目ごとに配布していたハンドアウトを整理してテキスト形式に体裁を整え、 学生にとってまとまった情報源となるようにした。同時に、トピックごとに概要チャートを示してコースやトピックの全体像・目標・流れを理解した上で各活動が行えるようにした。ハンドアウトの時と内容はほとんど同じであるにもかかわらず、整理と提示の仕方に系統性を持たせバインダー形式に変えてから学生の反応が変わってきたように思う。まだ 2 期しかたっておらず早計な判断は避けなければならないが、少なくとも現時点では市販の教科書を使わないことに対する否定的な意見はなく、コース内容や教材に関するコメントは肯定的である。しかし、テキストとしてはまだ不十分な点も多く、今後さらに改良を重ねる必要がある。

4–6. ビデオ制作

SACLA が完成した 2003 年春学期以降、レベル 4 ではメディア教育センターやメディアプラザスタッフの協力を得て、毎学期ビデオ作品を制作してきた。一つの番組や CM を仕上げていく過程は、クラスやグループ内での話し合いやメディア施設スタッフとの接触等、 実際場面の宝庫であるが、一方で様々な問題も抱えている。中でも大きな問題は制作の意義や内容の決定をめぐる教師と学生の思いのギャップである。教師は教育的成果を期待し、 制作にあたってはさまざまな制限を加えるが、 学習者はエンターテインメント性、創造性、独自性を求めることが多い。そのような意見の衝突や調整も重要な実際場面ではあるが、現実には限られた時間内で作品を仕上げるための妥協となり学生のモチベーションを下げる結果になってしまったこともある。 もう一つの問題は、 最終的な編集にあたり、編集技術とボランティア精神を持つ学生の存在が不可欠だということだ。試験や提出物の多い学期末に編集作業に多くの時間を費やすのは大変な負担である。

このような状況を改善するため、 2007 年秋学期は「環境に関する公共 CM」の制作を試みた。前のトピックでレポートを書いた問題についての、

社会に対する自分なりの働きかけと捉え、各自 1 分前後の作品を仕上げ、それをまとめることとした。プロダクションルームでの制作に当てたのは 3 授業時間である。クラス全員でそれぞれの企画や進捗状況を聞き、アドバイスし合い、最も効果的な提示順番を決めたため、最終編集はその順に作品を並べて DVD にするだけで済むようになった。それぞれの独自性が発揮されつつも、1 分前後という時間と公共広告という内容から必然的に制限される部分もあり、前述の二つの問題がかなり解消された。また自分自身の作品に対してだけでなくクラス全体としての作品に対する満足度も高かったようである。この時の学生数は 7 名だったが、学生数が多い場合には 2 ～ 3 人ずつのグループによる制作も可能である。今後も状況に応じた取り組み方を考えていきたい。

5. 「インターアクション」の観点から見た実践と課題

5–1. ビジターセッションにおける留学生とビジターの関係

ビジターセッションというと、留学生の発表をビジターが聞き感想や意見を述べる、留学生のインタビューにビジターが答える、意見交換をする、等のスタイルが一般的である。そのような中で、「川柳互選会」における留学生とビジターとの関係にはビジターセッションにおける重要なヒントが含まれているように思う。それは、地域の川柳会有志がビジターとして授業に参加し、同じ立場で互選や説明をし合うという形式である。出席者全員が 2 句ずつ作り前もって短冊に書いたもの（無記名）を黒板に掲示し、よいと思う句を 3 句ずつ選び紙に書いて投票する。それを集計し、得点の高かった句から、選んだ人全員の感想を聞いた後で作者のコメントを聞く。このとき、得点は気にせず作者の意図と選者の受け取り方の違いを楽しむように配慮する。留学生の説明を聞いた川柳会の方々は留学生達の感性や独特の表現に、川柳会の方々の説明を聞いた留学生達は川柳会の方々の句の奥深さに、それぞれ納得したり感心したりして、毎回充実した時間となっている。そこには年齢や経験、日本語能力を越えた交流があるように思う。日本語母語話者というだけで教える立場になってしまうので

はなく、「同じ立場」で活動し内容面で認め合えるようなビジターのあり方が重要なのではないかと感じている。

5–2.　学外でのインターアクション

それぞれの学生が日々学外で本物のインターアクションを行っており、それが日本語習得や日本理解に大きな役割を果たしていることは確かであろう。しかし留学生個人として遭遇する場面には限界もある。そこで、このコースでは個人ではなかなか経験できない相手とのインターアクション場面を設定した。多くの学生が最も「印象に残った」と言うのは小学生との交流である。小学 4 年生のクラスを訪問し、グループに分かれて留学生が準備した話をし、小学生が準備したゲーム等を行い、給食を共にする。活動後にはお礼の手紙のやりとりをする。小学生との交流を通して、日本の教育や学校に対するイメージが変わったという学生や、将来 JET プログラムで日本の教育現場に入りたいと考え始めた学生もいた。

このような学外活動をコースの中に組み込むためには訪問先の協力が不可欠である。事前準備としては、教師による電話やファックスでの日程の調整と活動計画の確認が必要である。特に小学校への訪問では、客としてもてなされる立場になるのではなく、お互いにとって意味のある交流にすることが重要であると考えている。そのため、相手の立場に立った十分な活動内容の検討と調整、準備を心がけた。具体的には教師が事前に小学校を訪ね担当者と直接話し合った他、留学生の準備したものを前もってファックスで交流相手に伝えるようにした。

5–3.　クラス内でのインターアクション

クラスの中では日々留学生同士のインターアクションが起こっており、それこそが最も身近で自然な本物のインターアクションと言えるのではないだろうか。4–4. にも記した「クラスの学生とのやりとりから多くを学んだ」という学生のコメントの意味は大きいと思う。クラス内でのインターアクションという視点に立って様々な活動を見直すことによって、新たなアプローチの可能性も出てくるのではないかと考えている。例えば作文の

過程で学生同士のアドバイスや推敲といったインターアクションの可能性等も、コースの特徴に適した形で探っていきたい。

また、クラス内でのインターアクションにおいては、クラスを構成するメンバーの個性と相互作用も注目すべき点である。筆者がこれまでに担当したクラスでは、リーダー的学生、ムードメーカー的学生、肯定的発言が多い学生の存在がクラス全体を積極的にする傾向があった。また、遅刻・欠席が少ない、宿題・提出物を忘れない、積極的な取り組みをするといったクラスの雰囲気の中で互いに良い刺激を与え合いそれぞれが実力以上のものを出していった場合もある。しかし逆のケースもあり、人間同士のインターアクションにはシラバスデザインや教材を越えた要素も大きいということも考慮に入れる必要があるのではないだろうか。

まとめ

コースの目的、学習者のニーズ・ビリーフ、施設を含む学習環境等によって学習形態は違い、全ての学習者にとって理想的といえるカリキュラムはないかもしれない。しかし、実践日本語では実際使用場面で使える総合的な日本語運用能力の習得を目標に、シラバスをデザインしオリジナル教材の開発と実践を重ねてきた。その結果見えてきた成果や課題をふまえ、今後もさらに改善を続けていきたいと考えている。

注

1）環境省／中日英国大使館　企画・制作（2004）『環境学習に役立つ CD-ROM 解決！ 地球温暖化！』英国大使館への申し込みにより無料提供される。

2）千葉コンベンションビューロー国際交流ボランティア登録者にビジターを依頼することもある。

3）クラス単位で予約使用できるコンピュータールームが 2 教室ある。また、2003 年春に完成した SACLA（Self-Access, Communication, Learner Autonomy）には、自由に利用できる 100 台のコンピューターの他、予約が必要なプレゼンテーションルーム、ヴァーチャルスタジオ、プロダクションルーム、MPR（Multi Purpose Room）等がある。

4）留学生支援システムに関しては、ファン他（2005）第 II 部に詳しい。

参考文献

加納千恵子・清水百合・竹中弘子・石井恵理子（2004）『BASIC KANJI BOOK VOL. 2』第 5 版 凡人社。

ネウストプニー、J. V.（1995）『新しい日本語教育のために』大修館書店。

ファン、S. K. 他（2005）『異文化コミュニケーション研究所共同研究プロジェクト 外語大における多文化共生――留学生支援の実践研究　研究成果報告書』神田外語大学。

――――（2006）「社会文化・社会言語重視のインターアクション教育――初級日本語学習者向けの日本事情科目としての試み」神田外語大学日本研究所日本事情研究会　編『論究日本事情』（9–30 頁）ブイツーソルーション。

付録　2007年秋学期実践日本語授業計画　レベル4

	トピック	期間（回数）	社会文化に関する学習内容	社会言語に関する学習内容	言語に関する学習内容	PA・ビジター招聘日	特記事項
1	情報提供のスピーチ	9/17（月） ～10/5（金） （11回）	日本語でのスピーチ、意見や情報の交換をする ・ふさわしい内容と構成 ・会場設定や進行の仕方	スピーチや質疑応答での話し方や態度について考える スピーチの文体や論理的な展開に必要な表現を知る	・丁寧な話し言葉 ・接続詞 ・箇条書き（PPT）	PA：スピーチ 10/4（木） 10/5（金）	学生ビジター （MLで募集）
2	川柳＆俳句	10/9（火） ～10/19（金） （6回）	川柳と俳句についての知識を得る ・川柳と俳句の違い ・日常生活に溶け込んだ川柳・俳句 （新聞 お茶のラベル コンテストなど） 互選会を通して年長者との交流を経験する ・趣味の会の存在 ・互選会の方法や意味	定短型の中に状況や気持ちを凝縮するための工夫を知る わかりやすい説明のし方を考える 他の人の作品に対して感想を述べるときの表現を知る 年長者に対する態度・話し方を考える	・簡潔な表現 ・印象的な表現 （倒置　強調　慣用句 擬音語・擬態語） ・婉曲な表現 ・待遇表現	PA：川柳互選会 10/19（金）	社会人ビジター （幕張川柳会）
3	環境問題	10/22（月） ～11/15（木） （12回）	環境問題への取り組みに関する情報を得る （インターネットなどから） ゴミ処理場を見学し、処理過程とそこで行われている環境教育を知る レポートを書く 情報や体験をもとに環境問題についての考えをまとめ、発表し、意見交換する	施設訪問のマナーと質問のし方を考える レポート作成上の留意点を知る ・レポートの文体、よく使われる表現 ・事実と意見の区別　自他の意見の区別 書き言葉との違いを意識して話す	・助詞 助詞相当語句 ・伝聞 ・引用	PA：クリーンエネルギーセンター見学 10/29（月） PA：レポート発表会 11/13（火）	10/29 神田休講 11/1（木）の授業と振替 学生ビジター （MLで募集）
4	メディアリテラシー （CM・広告） （ビデオ制作）	11/16（金） ～12/10（月） （12回） 13（木）	日本の広告/CMを分析・考察する ・内容、ターゲット、特徴、戦略 ・自国の広告/CMとの違い ・公共CM 公共CMビデオを制作する ビデオ制作の過程で、学生間や教師との意見調整、関係者への依頼などを行う	説明し意見を述べるときの表現を知る CMに効果的な表現や手段を考える 場面や相手に応じた表現を考える （説明する、意見や感想を述べる、反対意見を言う、代案を出す、依頼するなど）	・ナレーション ・副詞 ・依頼表現	PA：i-movie講義 11/29（木） i-movieによる制作 PA：ビデオ上映会 12/13（木）	大学スタッフ （SALCサポートスタッフ） 学生ビジター （MLで募集）
5	まとめ	12/11（火） 18（火） （2回）			文法の復習		

備考：12月14日（金）筆記試験、12月17日（月）口頭試験